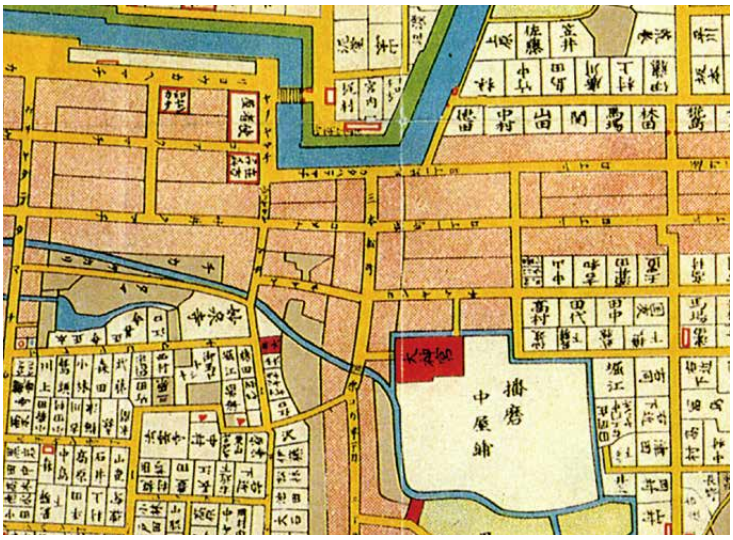
久留米入城 400年 ARIMA

久留米にある2つの城下町!?

久留米城下の絵図と地形

城下町といえば、お殿様のお膝元。威厳ある石垣造りの城郭を背にして賑やかに広がる町並み。久留米城の城下町も、久留米藩初代藩主・有馬豊氏の入城を機に整備され、明治維新を迎えるまで有馬氏のお膝元として栄えました。

では、もう1つの城下町とは？江戸時代までの城下町とも無関係ではありません。今回は、2つの城下町を探る時間旅行。約４００年前、豊氏の入城から出発しましょう。



天保時代久留米城下町絵図（部分）
底本は久留米市教育委員会蔵
『久留米市史　第２巻』付図として刊行

久留米には、お殿様とゴム産業の城下町があった!!
今も残る地形の高低差から、江戸時代の城下町の様子が感じ取れます。

1 久留米城下町の成立と展開

・城下町の地形と配置

１６２１年、有馬豊氏の久留米入城に伴い、城下町も本格的に整備が開始されました。その**都市計画**を理解するためには、まず核となる久留米城の立地を知ることが肝要です。**高低差**が鍵となります。

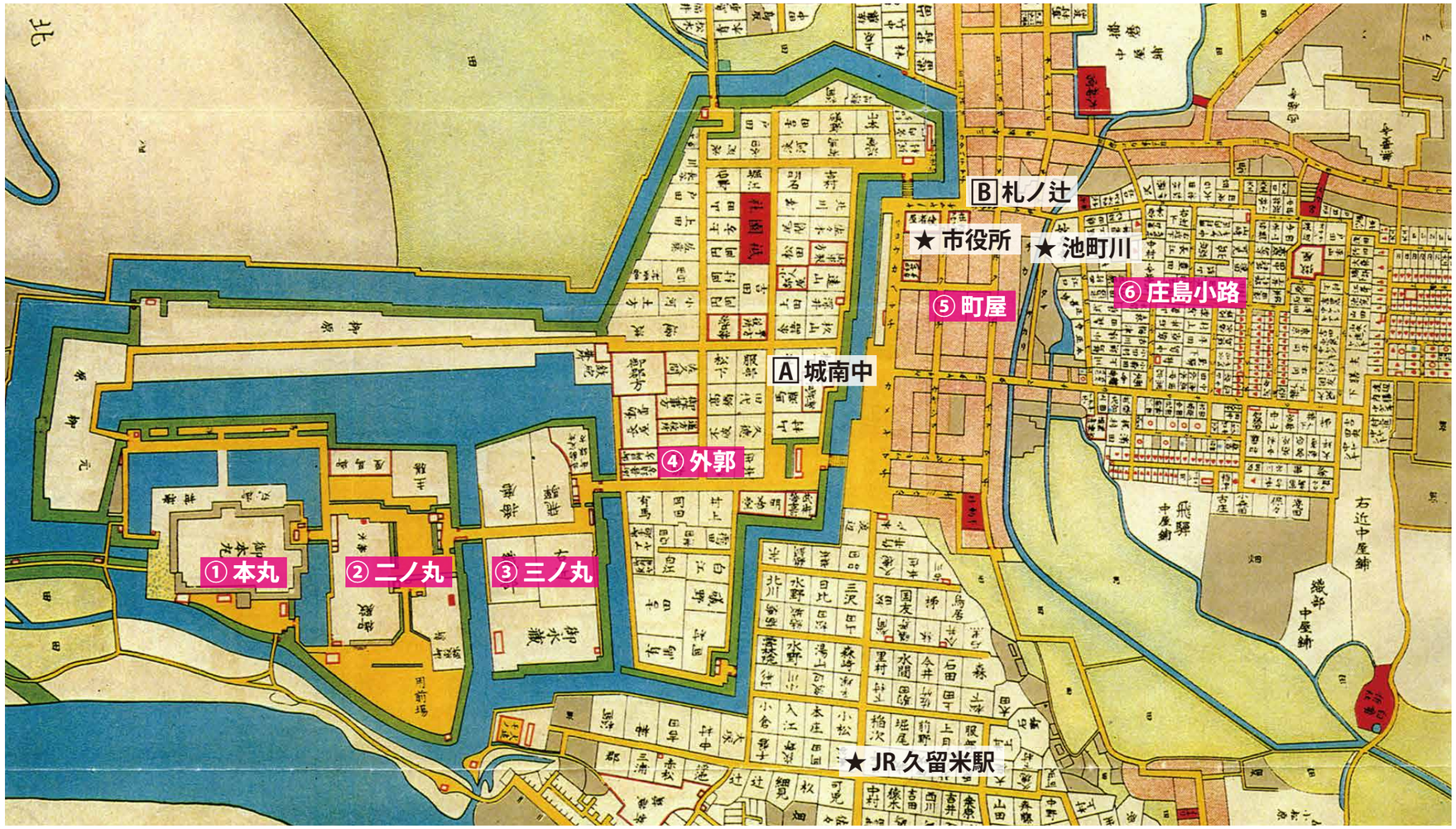
久留米城が本丸から南に向かって二ノ丸、三ノ丸、外郭（そとくるわ）と連なっているという、平面の配置は「Web版第２回」にみた通りです。

クリックして読む

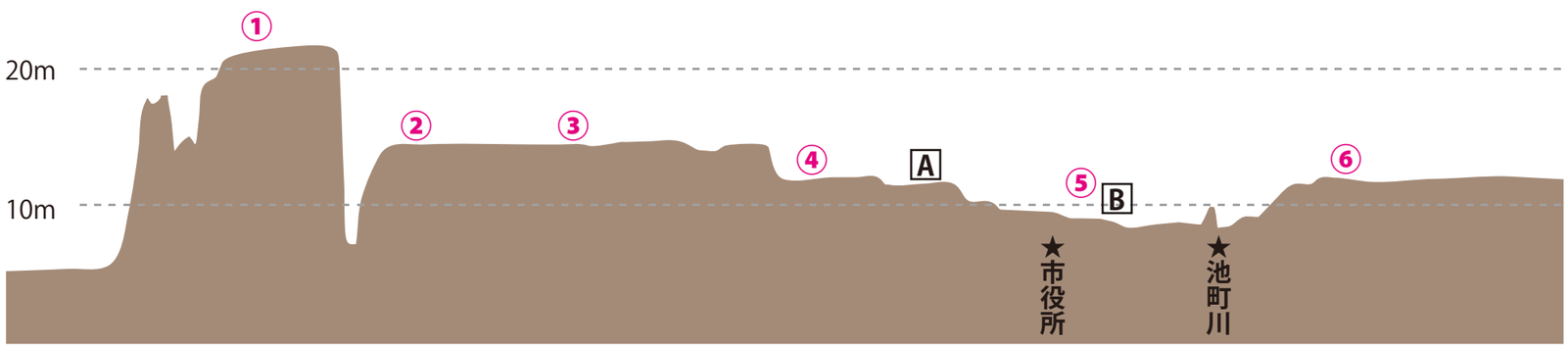
では、断面はどうでしょう。実際に地面を横から見ることはできませんが、本丸跡から注意して歩いてみると、緩やかに下っていくことに気づくのではないでしょうか。

豊氏は、この辺りで最も標高が高い丘陵上を本丸と定め、台地の縁辺までを久留米城の範囲としました。そして、外郭の南面に広がる谷部分を埋め立て整地して**町屋**とし、その周りの比較的標高の高い土地に**武家屋敷**を建設することにします。

城と城下町は堀で明確に分けられ、外郭の南の**大手**（おおて）**口**、東の**櫛原**（くしはら）**口**、南東の**狩塚**（かりづか）**口**、南西の**京隈**（きょうのくま）**口**の４か所が、城外との出入り口となりました。



上・天保時代久留米城下町図（部分）／下・地形断面略図



鉄砲小路跡（蛍川町）。城下町時代の鉤の手の道筋が良く残る。道沿いには、天明年間（1781 ～ 9）に鉄砲小路に創建された秋葉神社がある。火災の多かった城下町では、各所で火災除けを祈願して火除けの神である秋葉権現を祀った。鉄砲小路の秋葉神社は、近代以降、現在地（蛍川公民館内）に移された

武家屋敷は、豊氏の代には**京隈小路・櫛原小路**に上中級武士の居住区が出来始め、のちに重臣の下屋敷が置かれる**十間屋敷**の建設にも着手します。４代頼元の代までに、下級武士が居住する**庄島小路**、**鉄砲小路**が整備されました。

町屋は、豊氏の久留米入城に伴い、田中時代の城下町の一部が城内に取り込まれ、町人や寺社は城外に移転します。寺は、豊氏が福知山から連れて来た僧に創建させた寺とともに、**寺町**の基礎を形成しました。神社は、**祇園社**（素戔嗚神社）は外郭に残されましたが、**山王社**（日吉神社）は現在の日吉町へ移されました。

日吉神社。有馬氏の久留米城二ノ丸整備に伴い、この地に移された

寺町。城下町の住人の墓地でもあり、延宝年間（1673 ～ 80）には末寺を含め 25 か寺が建ち並んだ

クリックして読む

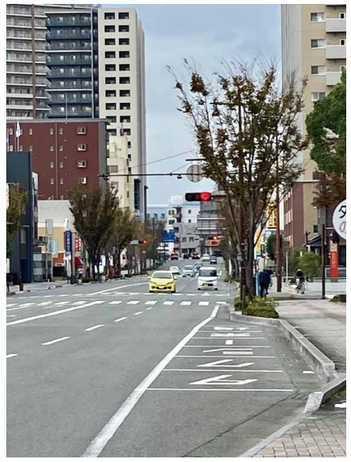
田中時代に４丁目まであった長町（のち**通町**）は、豊氏の代には東方へ９丁目まで伸び、２代忠頼の代には10丁目まで町人の家が建ち並ぶまでに発展しました。

城下町の中心部には、大手口から狩塚口にかけて**呉服町**、**両替町**、**片原町**などが広がり、さらに**三本松町**の南には柳川往還筋に**原古賀町**が拡張していきました（両替町・柳川往還については「Ｗｅｂ版第１回」）。

現在、両替町公園や市役所付近に立ち、あるいは少し歩いてみると、南は荘島町（庄島小路跡）、西は京町（京隈小路跡）に向かって土地が上っていくのを感じることができます。いまや城や城下町の面影は一見わかりませんが、その記憶は地形や町割に問いかければ、現代の私たちの前によみがえってきます。

市役所前からの荘島小路方面。市役所を背にして正面をみると、荘島町に向かって上り坂になっているのが分かる

市役所前からの通町方面。４代藩主頼元の代には 10 丁目まで町屋が軒を連ねた。江戸時代の久留米城下町のメインストリートも、現在の呼称は「昭和通り」



市役所前からの京隈小路方面。ＪＲ久留米駅の方から自動車が下りながら向かって来る。坂本繁二郎生家や京町小学校のある駅の西側から、線路を挟んで日吉神社や明善高校の辺りまでが、京隈小路だった

・交流拠点の都市づくり

久留米藩の首都・久留米城下町。21万石と広大な藩領のどこへ向かうにも、通町筋と柳川往還の交差点「**札の辻**」が起点となります。その他の主要な道路も、城下から放射状に延びていきました。

街道は、参勤交代の大名、公務を抱えた幕府や諸藩の役人、商いを行う町人など、様々な立場の人々がそれぞれの目的で通行していました。

また天然の堀でもある筑後川では、水運を利用して、年貢米や菜種・藍などの産物が領内から城下に集められ、瀬下から若津（大川市）を経由して他藩や大坂に向けて輸送されました。

久留米城下町は、藩の産業や交通の発達に伴って、**人々の交流と物流の拠点都市**として成長を続けました。

札の辻跡。通町筋と柳川往還筋が交差点に置かれた高札場。久留米藩領の道路の起点

・防災の町づくり

4代頼元の代まで約70年の歳月をかけて、21万石の大名に相応しい久留米城とその城下町が完成し、城下町の人口は約9千人に上りました。けれども「まちづくり」に終点がないのは、現代も江戸時代も同じです。**災害対策**は、久留米城下町でも大きな課題の一つでした。記録に残る80件の災害では、火災が55％、洪水が27％だったといいます。

当時の家屋は木造で防火に限界があり、藩は延焼を避けるため、密集する建物を移転させて、**火除け地**（防火用の空き地）を設けました。また、城の各出入口に水桶を備える防火対策も行っています。

水害対策では、4代頼元の代に柳原の低地にある侍屋敷を京隈小路に移転させます。筑後川の水防工事とともに、城の周囲の貯水機能を高めるため、**堀の浚渫や土居のかさ上げ工事**も繰り返し行いました。

久留米藩の防災の町づくりによって、久留米城下町は少しずつ形を変えていきました。

2　都市久留米への発展

・城下町の近代

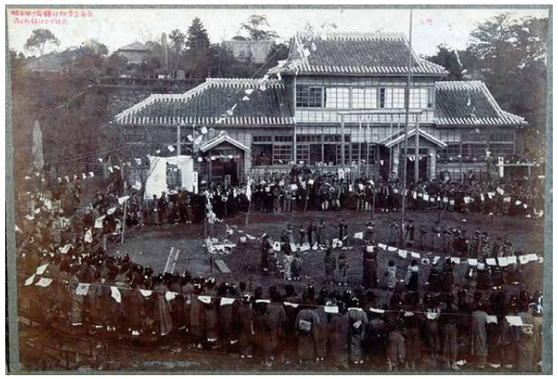
明治維新を迎え、1871年の廃藩置県で久留米藩は廃止され、最後の藩主・有馬頼咸は華族として東京へ移りました。

久留米城は、建物の大半は解体され、堀も次第に埋め立てられ、土地は民間に払い下げられます。本丸跡には1879年に有馬豊氏らを祀る**篠山神社**の社殿が建立され、やがて二ノ丸から外郭にかけては工場や学校、官公庁などの用地となっていきました。

1889年には、久留米市がかつての久留米城とその城下町を主な市域として誕生します。同じ年、九州鉄道株式会社（のち国有化、現ＪＲ九州）により博多～久留米間に**鉄道が開通**しました。その後、延伸され、京隈小路地区は線路で東西に分かれました。

久留米城とその城下町は、**陸軍の誘致**を始めとする軍都久留米のあゆみの中で、**工業都市**へと生まれ変わっていきます。

絵葉書「県社篠山神社境内ヨリ筑後川大鉄橋日本足袋株式会社ヲ望ム」

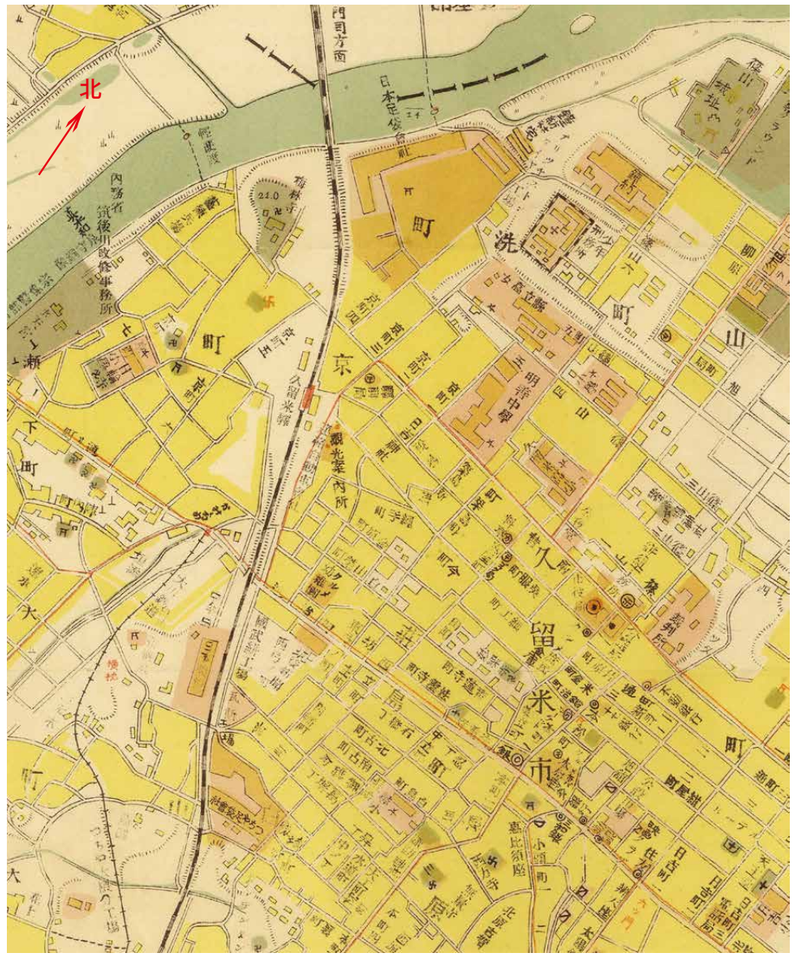


写真「明治四十年鐘紡秋季運動会　篠山町鐘紡女学校前」。篠山神社の社殿屋根などがみえる・二ノ丸跡は、鐘淵紡績（のちカネボウ株式会社・2007 年解散）の工場地となっていた

「京町第二公園」は京町にはない !? 江戸時代はこの辺りまでが京隈小路。1973 年、京町や築島町など 7 町の各一部と両替町が合併して城南町になる。公園の整備はそれ以前

明治前期に**つちやたび**（現・株式会社ムーンスター）、後期に**しまやたび店**（現・アサヒシューズ株式会社）が創業、１９３１年には日本足袋株式会社（元しまやたび店）のタイヤ部が**ブリッヂストンタイヤ株式会社**（現・株式会社ブリヂストン）として独立します。この**ゴム３社**が急成長を遂げ、久留米の工業を代表するようになります。その工場は、国鉄久留米駅を中心に旧二ノ丸から旧庄島小路にかけて拡大し、一帯は**「ゴム３社の企業城下町」**ともいうべき活況をみせるようになりました。その躍進を支えた要因の１つに、第１次世界大戦の**ドイツ人捕虜**による技術指導がありました（詳しくは、久留米市ホームページ「週刊　ドイツさんと久留米」をご覧ください）。

クリックして読む



『久留米市全図』
（昭和 11 年・部分）

九州鉄道（現ＪＲ）の線路の東側で筑後川沿いに「日本足袋会社」、「ブリッヂストンタイヤ工場」、久留米駅から南下すると線路沿いに「つちや足袋会社」がある。

二ノ丸跡に「鐘紡」、「つちや足袋会社」の北に「國武絣工場」、それと線路を挟んで「日本製粉」などの工場もみえる。

◆問合せ／久留米市市民文化部文化財保護課
TEL：0942（30）9322／FAX：0942（30）9714／E-mail：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp

・久留米空襲と戦後復興

第２次世界大戦末期の１９４５年８月11日、久留米市街地は米軍機による**空襲**を受け、約７割が焼失しました。敗戦４日前のことでした。

戦後、物資不足や住宅難からの**復興**の過程で、戦時下軍需産業に指定されたゴム３社の生産再開も順調に進み、鉄道交通路線も復旧しました。

空襲で溶けたガラス瓶
（久留米市埋蔵文化財センター蔵）

１９６０年には、ブリヂストンの創業者・石橋正二郎によって、ＪＲ久留米駅から旧城内を抜けて久留米大学病院をつなぐ**ブリヂストン通り**が開通します。正二郎は、人々の暮らしを便利にするとともに、歴史文化の継承のためにも、**有馬記念館**の建設や**梅林寺外苑**の整備など、多くの足跡を残しました。

ブリヂストン通り

東側の歩道の一部に、開通当時のレンガが残る

有馬豊氏の久留米入城から４００年。久留米城とその城下町は、地形を活かした豊氏の都市計画を基礎にしながら、火災や水害、空襲などの出来事を乗り越え、今日までイノベーションを繰り返してきました。これから移り変わる町並みにも、４００年の記憶が息づき、また新しい歴史が加わっていくことになるでしょう。

石垣ならぬ「タイヤ垣」（旭町）。旧三ノ丸付近